

天智天皇 山科陵水路その他整備工事に伴う立会調査

はじめに

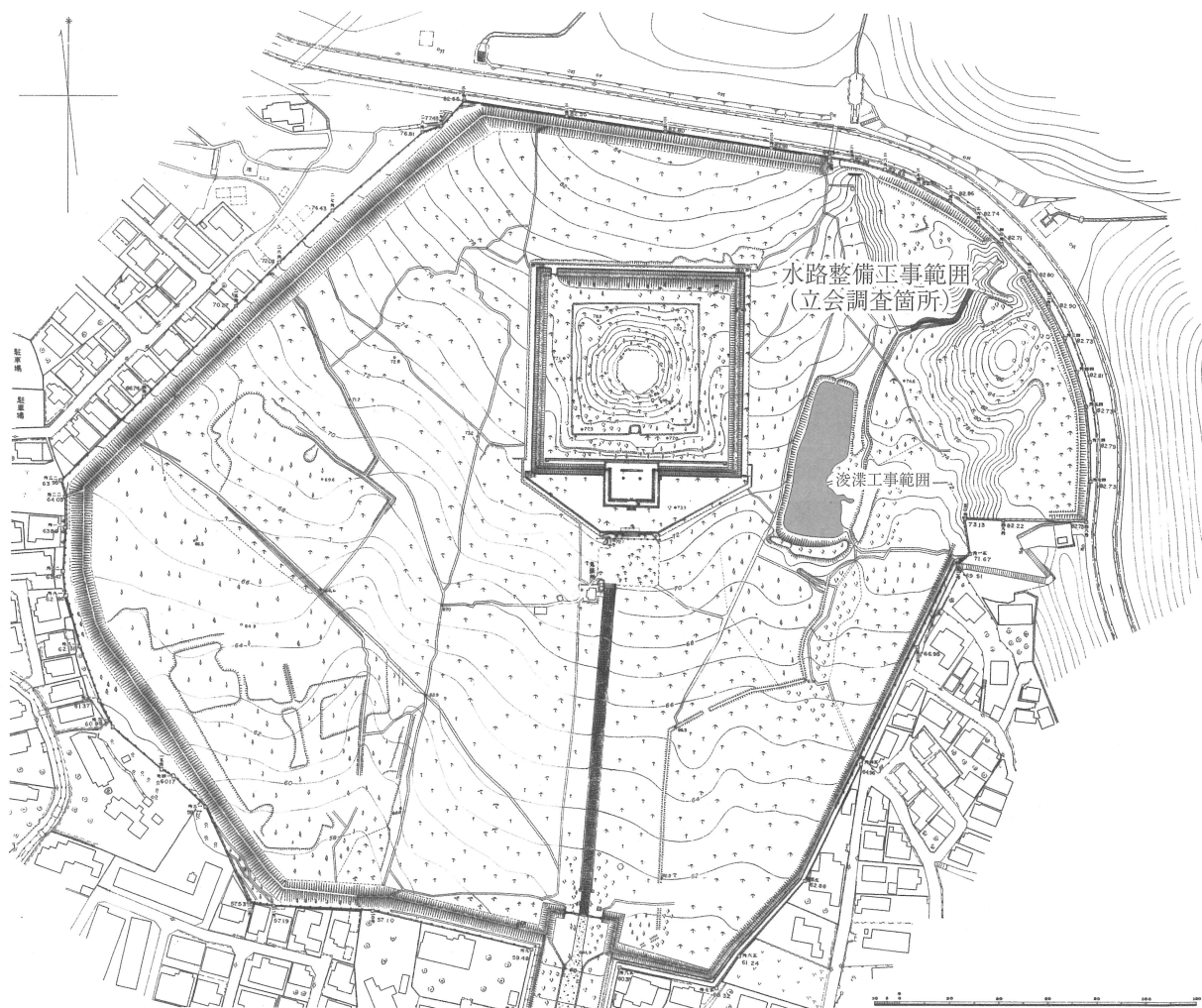
天智天皇山科陵（以下、「当陵」という）は、京都府京都市山科区御陵上御廟野町に所在する。本報告は、整備工事のなかでも、とくに水路整備のための掘削にともなう立会調査にかんするものである。

標記の立会調査は、平成 28 年度に実施した水路整備部分掘削の際に、施工地における遺構・遺物の有無を確認することを目的として、陵墓課職員が平成 29 年 1 月 30 日から 2 月 3 日までおこなった。なお、上記以外の工事期間中は、月輪陵墓監区事務所職員が随時立ち会った。

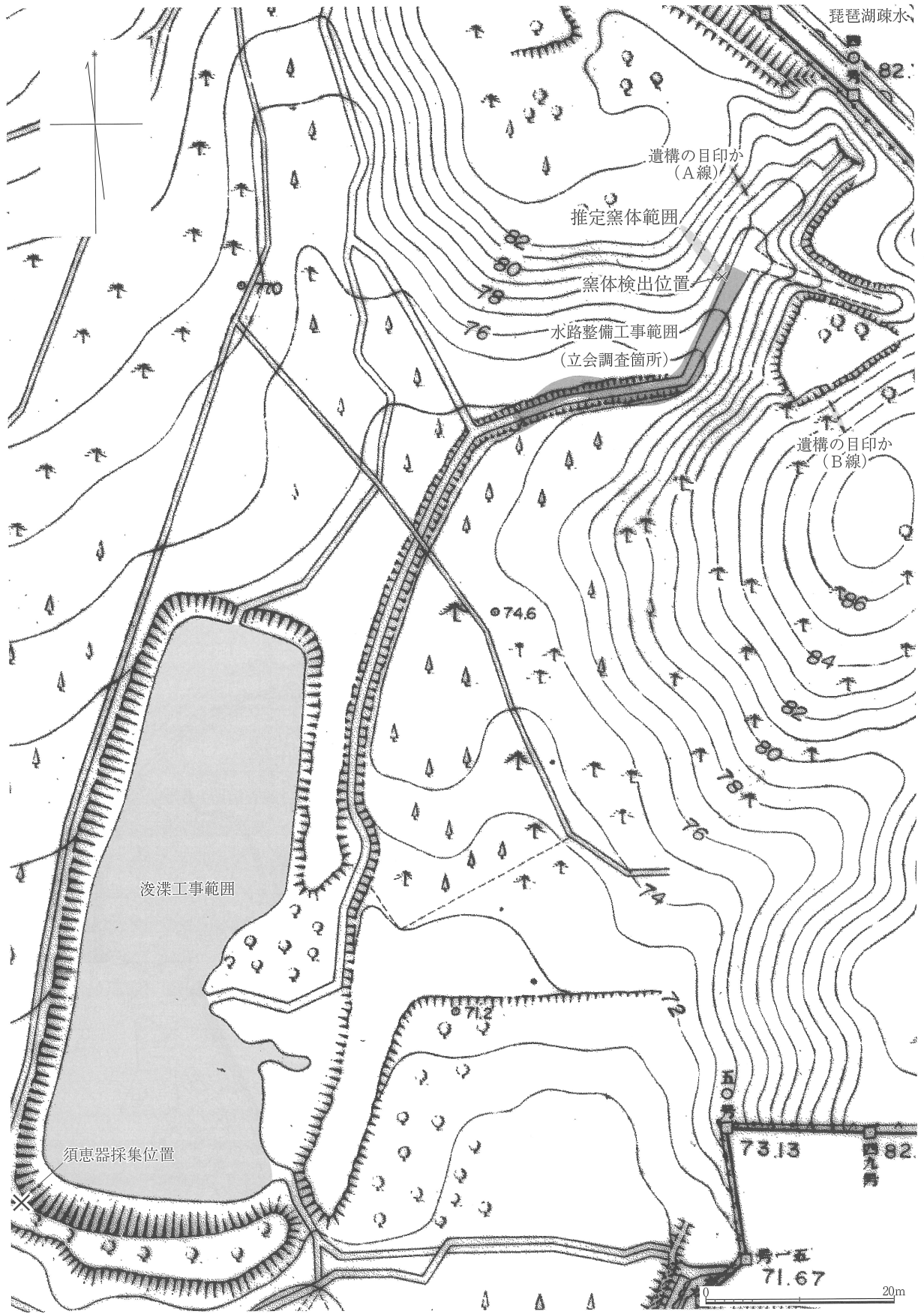
1 立会地点の状況

土層 立会調査地点における土層は、表土（Ⅰ）、流土（Ⅱ）、窯内崩落土（Ⅲ）、地山（Ⅳ）が確認された。Ⅲ層については、窯体片を含むため、窯廃絶後に内部へ流入した土と考えられる。Ⅳ層の地山は、窯体中央と考えられる部位が赤変しており、ここが窯体のなかでも焚口付近であることを示している。

窯体 立会調査をおこなった水路整備箇所北端付近の西側斜面において、赤変した土がわずかに露出していることを確認した。発見当初、この明赤褐色土が窯跡にともなう窯体の一部なのか、それとも動いてきた土なのかは不明であった。その後、工事前にこの部分の写真撮影および図面作成をするにあたり、周辺を精査した結果、明赤褐色土は水平に広がっていることを確認した。



第 12 図 山科陵 概略調査地位置図 (1/3000)



第13図 山科陵 調査地位置図 (1/600)

また、明赤褐色土の上には、窯体らしき赤変した地山起源のブロックなども検出されたことから、この水平な明赤褐色土を窯体の床面部分と考えた。床面部分と考えられる変色した地山は、中央が明赤褐色、南側の一部が橙色、北側が明黄灰色となっていた。

先述した通り、床面が赤変していることから、今回検出したのは窯跡でも焚口付近と考えられる。窯跡の規模は、床面の状況から幅1m以上ということ以外は不明である。遺物は検出されなかった。

2 採集遺物

立会調査で出土した遺物はなかったが、当陵内の調整池南西端付近の陵墓管理用巡回路において、須恵器片を5点採集した。このうち、2点は壺・甕類の頸部片と体部片、3点は器種不明の破片である。ここでは、実測・採拓をおこなった須恵器片について報告する。

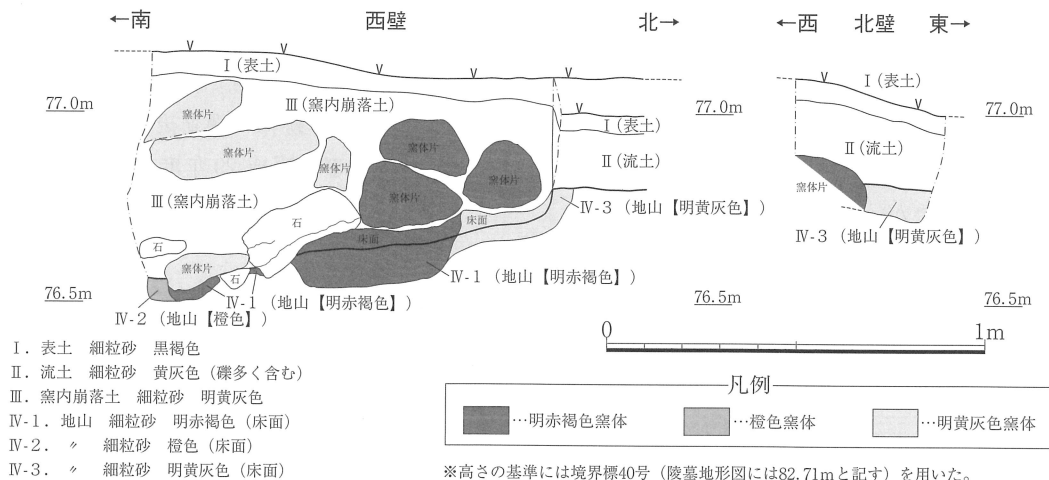
1の壺・甕類頸部片は、破面に自然釉がかかっているため、製品として消費地で使われたものではなく、明らかに生産地における失敗品である。1は、どこから運ばれたものか不明であるが、付近に須恵器窯があったことを示す遺物として重要である。外面調整は確認できない。内面調整には回転ナデを施す。色調は内面が自然釉のため暗灰褐色であるが、外面は灰色である。焼成は外面がひび割れており、不良である。2の壺・甕類体部片は、外面にタタキ痕、内面に当具痕が残る。色調は内外面が灰色、断面が暗赤褐色で、焼成は良好である。3から5は、器種不明の破片である。3と4については器壁が薄く、高杯を含む坏類の破片の可能性はあるが、5については内面が残っておらず、詳細は不明である。

3 陵墓地形図上の線について

立会調査中、陵墓地形図で現地の地形を確認した際、図上の等高線に対して直交する線が2本引かれている箇所（A・B線）があることに気が付いた。これらの線については、天智天皇陵付近窯跡の範囲内にあることから、何らかの遺構の目印として、描かれたものの可能性があるのではないかと考えた。

しかし、両線地点の現地表面観察では、遺構は確認できなかった。今回検出された窯跡とA線は、直線距離で約9m離れている。ゆえに、今回検出されたものとは別の窯ないし遺構がある可能性や、A・B線に意味がない可能性のほかに、地図上に線を引く際に位置を誤って、実際は今回検出された窯の位置が本来A線を引く場所だった可能性も考えられる。

今回検出された窯跡は、水路沿いの崖面で検出されたことから、おそらく水路を造った際に一部削られたものと考えられる。水路の上には、琵琶湖疏水が流れており、疏水が竣工した明治期に窯跡が確認された可能性がある。当陵の陵墓地形図は、昭和3年に初めて測量されたもので、明治よりしばらく経ってからつくられたということも考えると、遺構目印だった場合のA・B線の位置がどの程度正確なものかは不明である。



第14図 山科陵 窯体立面・断面図 (1/20)

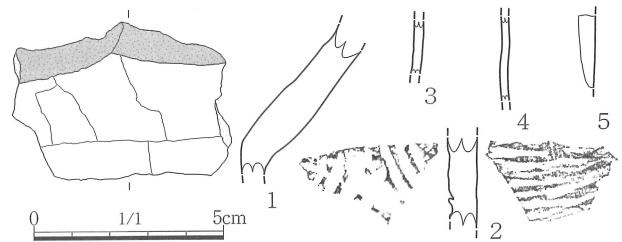
4 採集遺物の位置づけ

調査地採集の須恵器については5点しかなく、残存状況も良くないことから、それらだけで遺物の性格や位置づけを考察することは難しい。ここでは、須恵器片の位置づけのため、平成29年6月23日に京都市考古資料館にて実施した天智天皇陵西側の日ノ岡堤谷須恵器窯跡（以下、「日ノ岡堤谷窯」という）出土資料調査概要について述べ、調査で得られた知見と比較しながら遺物の位置づけについて考察する⁽¹⁾。

資料調査の概要 日ノ岡堤谷窯出土資料の調査では、整理用コンテナごとに資料を実見し、概要報告⁽²⁾掲載の資料を中心に観察をおこなった。製作技法の観察では、主として坏類のヘラケズリ・ヘラギリ痕跡を確認した。その結果、坏Hについてはヘラギリのものしかなく、坏Gは径の大きいものがヘラケズリ・径の小さなものがヘラギリであることがわかった。飛鳥時代の土器は、前半から後半にかけて、特に坏類が小型化することが知られているが、日ノ岡堤谷窯出土の坏類は、当陵採集の小型破片と比べると、0.5から1mmほど器壁が厚く大型であった。また、当陵採集の壺・甕頸部片と同様に、頸部がやや内湾するタイプの破片を確認した。当陵の破片には凹線は認められないが、そちらは装飾の凹線がつけられていた。

資料調査の成果 資料調査では、日ノ岡堤谷窯出土の坏Hに受部径11cm程度のものが残ること、坏Gの底部にヘラケズリ痕跡をもつものがあること、高坏の脚部に切れ込み状になったスカシ孔が2段みられるものがあることなどから、同窯の位置付けが飛鳥地域の土器編年⁽³⁾でいうところの飛鳥I様式のものであることが明らかとなった。飛鳥I様式は、さらに古相と新相とに分けることができるが、日ノ岡堤谷窯の資料は、上記の特徴から新相に属するものである。当陵採集の須恵器は、日ノ岡堤谷窯のものに比べると、坏類の可能性のあるものは小型で、壺・甕は装飾性が少ないものである。飛鳥時代前半（飛鳥I様式）から後半（飛鳥II様式）には、坏類が小型化し、器種全体で装飾が少なくなり、後半の途中（飛鳥III様式）からは今度は坏類が大型化していく。そうした変化からみた場合、採集の須恵器は、日ノ岡堤谷窯出土資料より新しく、坏類が大型化する段階よりは古い、飛鳥II様式期頃のものと考えることが可能である。

小結 調査の結果、当陵採集の須恵器は、飛鳥II様式期頃のものであることが明らかとなった。飛鳥II様式の下限とも関係するが、立会調査で検出した窯跡が、当陵の造営開始と同時に操業を止めたかどうかは不明である。しかし、少なくとも天智天皇崩御後には、山科陵兆域内での須恵器生産はなかったと考えられる。



第15図 山科陵 採集遺物実測図 (1/2)

まとめ

今回の立会調査は、天智天皇陵付近窯跡の範囲内であったため、遺構・遺物の出土に注意した。そして、調査の結果、窯跡を1基検出した。窯跡周辺では遺物が確認されなかったが、調整池の南西隅付近において焼成失敗品の須恵器片を採集した。今回検出した窯跡で焼成されたものか不明であるが、近傍で須恵器生産がおこなわれていたことを示す遺物として重要である。今回検出した窯跡は、調査後にシートで覆い、土嚢を積んでこれ以上崩壊しないよう保護した。窯跡の養生後、整備工事は平成29年度までかかるよう一部内容に変更が生じたが、変更後は予定通り施工した。 (横田真吾)

註

- (1) 資料調査では、京都市埋蔵文化財研究所と京都市考古資料館の丸川義広氏にお世話になった。記して感謝申し上げる。
- (2) 丸川義広・内田好昭・平方幸雄「日ノ岡堤谷須恵器窯跡」『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所、1997年。
- (3) 西 弘海『土器様式の成立とその背景』真陽社、1986年。



1 窯体（東から）



2 窯体（南から）



3 調査地（南から）



4 採集遺物